カロベエイでインテビューしたベティさんとお子さんの写真

アシストアフリカ!

アフリカは今、世界でも最大規模の国内避難民と難民を抱える地域です。「アフリカ最大の難民危機」と指摘されるほどの事態にもかかわらず、その実情が日本に伝えられる機会は少なく、知るすべも限られています。日本から約1万km離れた大陸で、何が起きているのか。タウトク編集部では、南スーダン、ケニア、ウガンダ、シエラレオネで活動するNGOピースウィンズ・ジャパンの協力により、その現実の姿を伝えていきます。支援活動を続ける同スタッフの奮闘のレポートを紹介しつつ、アフリカが抱える問題を少しずつひもとき、少しでも身近な出来事だと感じられるようにしたい。

株式会社メディコムでは、読者の皆さんにタウトクを1冊(350円)購入いただくにあたり、その約1%である3円をアフリカの復興支援のために送金します。

「支援している」という高みに立った目線ではなく、積極的に関わり合いをもつことで現地の様子が気になるようになり、やがて世界で起こっているいろんな紛争や悲劇と、自分たちは決して無縁ではないことを肌で感じるための「3円」だと思っています。ぜひこの1%運動をご理解いただき、本誌連載にご注目ください。

PWJの携帯サイトはこちら!

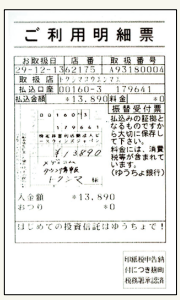
世界各地で支援活動を続けるスタッフからの「現地活動ルポ」、最新のNEWSなどの情報が携帯からチェックできるようになりました!
左のQRコードからアクセスしてみて!
http://www.peace-winds.org/m/

タウトクでは毎号、アフリカの国内避難民・難民支援事業へ送金した金額=タウトクの販売部数×3円を読者のみなさんにお知らせします。

タウトク11月号の販売部数

4,630部×3円=13,890円

を支援金としてPWJを通じアフリカの国内避難民・難民支援事業に送りました。



peace winds JAPAN

タウトク 月刊タウン情報トクシマ
medicomm inc
株式会社メディコム
月刊タウン情報トクシマ編集部

ピースウィンズ・ジャパン現地レポート

新たな国で定住を目指す難民たち
ー地域住民と共存する「カロベエイ居住地区」でシェルター支援ー

「難民キャンプ」。皆さんも、紛争や難民に関する話題で、よく見聞きするキーワードだと思います。ケニアのカクマ難民キャンプやダダーブ難民キャンプのように、開設から20〜30年にわたっている例がありますが、定義としては、あくまで「一時的な避難場所」になります。受け入れ国側は「一時的」を前提にしているため、運営にかかる財政面の負担などから、キャンプの存在自体を問題視しているケースも少なくありません。

こうした事態を解消しようとできたのが、ケニアの「カロベエイ居住地区」です。約30km離れたカクマ難民キャンプの長期化や難民の増加(約14万人)に追い打ちをかけるように、隣国南スーダンの内戦による難民の流入が相次いだことを受けて、開設されました。主に、母国への帰還が難しい人たちが身を寄せており、2017年11月時点で約3万8000人が生活しています。「難民キャンプ」と大きく違う点は、従来の地域住民が、居住地区内の学校などを利用できることです。これは、難民が新しい国で定住するためには地域住民との共存が欠かせない、という考え方が根底にあります。同じ地域で暮らすのに、難民だけが支援を受けていては、公平性が保てません。元々暮らしていた地域住民たちも、貧しい生活を送っているケースがほとんどだからです。

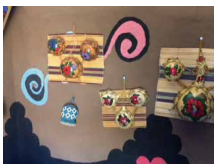
私たちピースウィンズ・ジャパン(PWJ)は、ケニアでカクマ難民キャンプやダダーブ難民キャンプでの支援を続けてきましたが、2016年からカロベエイ居住地区でも支援を始めました。具体的には、難民たちの暮らしの拠点になるシェルターの建設です。これまで、緊急用のプラスチック製のものを約450件、石を積み上げた頑丈な造りのものを約200件、それぞれ建てました。

私は普段、東京でアフリカ事業担当者として、外務省などへの事業申請業務を行っていますが、9月下旬、現場のニーズや事業の進捗を確かめるため、カロベエイ居住地区を訪ねました。印象に残った夫、娘と3人で暮らす南スーダン出身のベティさん(24)の話を簡単にご紹介します。彼女は一年前、ケニアに避難してきたそうです。現在は、支援団体にニーズを伝える取りまとめ役などを担っており、とてもしっかりした方でした。私と同世代のベティさんが、戦争を体験し、国を追われ、過酷な道のりをたどってきた、ということが信じられませんでした。今後の生活について尋ねると、「祖国に戻ることは考えていません。今は、その日をしのぐことだけで手いっぱいだけれど、なんとかなっています。今後も、銃声が聞こえない安心できる場所で暮らしたい」と話してくれました。彼女の目は、とても切実なものでした。

今回の訪問では、難民たちが「安心」できる空間を提供することの重要さを、より強く実感する貴重な機会となりました。私たちPWJは今後も支援を継続し、一日でも早く、より多くの難民の方々の手に届くよう、活動していきます。

アフリカ事業本部担当　アレン キム

ベティさんの暮らすシェルター(PWJが支援したもの)



カラフルにデコレーションされた家の壁

ベティさんの夫と親戚の子供がお昼ご飯を食べている様子

*本事業は、ジャパン・プラットフォームからの助成金や個人・法人のみなさまによる寄付金により実施しています。